



§ EMS-BMS (続)

さて、今、日本の自転車一台の中身を観察してみると、どこのメーカーのものかわからないということは実感しての通り。たしかに「〇〇自転車製・××××」というブランド名は付いているが。すなわち、中身、部品一つ一つが、〇〇自転車以外の製造所で造られている。自転車(完成車)メーカーといえども、多くの部品メーカーと繋がりがなければ成り立っていかない。一時は、部品屋の方に主導権があったぐらい。ブランド名はあっても、あながち、その自転車(完成車)メーカーが親、部品メーカーが子、という上下のランク付けは無かったともいえる。それぞれが、自転車造りのスペシャリストという自負があった。このグループ、まさに、「日本BMS」だ。これらをシステムティックに考え、企業を構築していけば、即、BMS EMSとして日本の自転車造り、太鼓判を押せる。

ところで、以上は、いわゆる大手自転車企業での話で、問題は、いわゆる中小企業にある。それは、「価格の安さ」で勝負しなければならない点にある。ブランド商品は、価格が高くても容認されている。(もちろん品質も保証されている)。しかし、ノン・ブランド製品は、まず、安いことが条件に。

そして、安全基準をクリアする程度の製品でなければ、日本では罷り通らない。そういった自転車はもう、日本では造れないか、だが、できると断ずる。

「殷鑑近きにあり」で、昔、「問屋自転車」というのがあった。これだ。「XX自転車商会」というような所で“出す”自転車をいった。この“出す”が議論点。すなわち、彼らは、あながち、製造ショップを持っているわけではないが、自転車を世に売り“出し”た。「〇〇号」とかいうような製品名はつけているが、名(ブランド名)にこだわったものではない。

この術(て)をシステムティックに整理し、“EBMS”企業とする、これが日本の自転車造りということになる。(Eは Economical のE)

今は、自転車造り屋(完成車、部品)国外にも、それなりのレベルで多々ある。ITの時代。うまく、それにのっていき、たとえば、「安い自転車を」という要望であれば、それなりの選択枝でまとめあげ、世に“出す”ことは可能だ。日本製だとか、輸出・入だとか、ブランド名のこだわりだとかを捨て去り、Bicycle Manufacturing Service 企業なり、と割り切っていかななくてはなるまい。

ともあれ、BMSにしてもEBMSにしても、それらのシステム構築指導が先決問題だが、われわれ「輪和会」には残念ながら、その実行力はない。ここでは、ただ、「口角泡を飛ばした」のみ。後は業界の各種組合、各協会、指導行政機関に委ねるしかないことを謝して終わる。

(本記事の無断転用については、固くお断りいたします。)